

句集
相聞歌



富重かずま

角川書店

句集 相聞歌／目次

コロラード（一九五九年～一九六五年）

タマラナー ロンドリーナ（一九六六年～一九六八年）

マリランジャ・ド・スール（一九六九年～一九七四年）

サンジョン・ド・イヴァイ（一九七五年～一九七九年）

サンパウロ（一九八〇年以降）

註

句集名「相聞歌」に就いて

あとがき

装幀 熊谷博人

コロラード

一九五九年～一九六五年

独立祭雷雲四方にこぞりゐて

迷彩の墨痕艶に大蜥蜴

天主堂先づ建ちて棉咲き満ちぬ

熱き日を沈むる柿の花の海

大蜥蜴とつさに投げる物もなし

夏痩せてアマゾン落ちを語らるる

海の香を恋ひ濁流に浴びるたり

路樹影や黄道北へ帰りそめ

雷雲の群れ迫れども良夜なる

時雨るるや香に翔つ鳩の薄荷畑

秃鷹の賤しき群も烏雲に

遅月の暈着て昇る焚火祭

枯野バス処置なき牛の群に従く

山焼きを四方の夜景に新開地

異教徒を手燭の巡る受難節

樹海焼いて夢縦横に青写真

濁流を死体漂ふ野分かな

受沈子につばくら何処へか帰る

啄木鳥や樹海眠りに就いてのち

粗朶積んで戸毎に焚火祭用意

枯れ珈琲樹海のつばめ誰か見る

夏荒海越す満身に切手貼る

地の底の蝦蟇鳴き出しぬ雷雨晴

気付け火酒あほり再び炎天へ

百軒も半ばに減りて移住祭

浮草の大河を流る旅のはて

雲炎えて飛ぶ鳥もなき十二月

早魃の昼寝は哀れきはまれり

大旱海洋のなき地図貼られ

政敵に火箭放たれて樹海燃ゆ

黒人に嫁し裏町の片陰を

杭揺れて怒気満身に蠍出づ

劍立てて蠍走行鮮やかに

売りに来し玉子悉皆喜雨に濡れ

蛇に喫まれしと久しき配乳夫

蜂鳥の巢のたまごなる真珠つぶ

やま焼きの余燻の海を日暮バス

昼木兎のとがむる蜜柑急ぎもぐ

濯ぎ物乾きて樹海夜半も燃ゆ

樹海燃ゆ煙雷雲につながりて

火の酒をなみなみと注ぐ火事見舞

ぶたれ独楽遠心永久に師を恋へる

受難像無月明りに担いてゆく

棉摘期終る軽雷いづくにか

森こだまして秋の夜を耕せる

黄道は快晴寒き木蔭とす

蟻塚は並び貯金は減ってゆく

元旦の蜂鳥めぐる鳳凰樹

屠蘇酌んで住みつく南回帰線

黄熱病出づ大雨季の上りつつ

秃鷹は雲の崩るる上を舞ふ

貸牧に着く牛の群十六夜

日がな蝶吹雪く公園管理人

蝶吹雪今日三日目に入りにつけり

火焰樹は燃えつぎ薄れゆく故郷

濯ぎ番待つ泉辺の草に座し

一人赴きて隣町に写真館をあける 三句

かはほりとわが夜の仕事始まり

写真屋のわが言ひ訳に轉れる

大花野距つる妻へ走り書

青き太陽雷死の柩また通る

やま燃えてゐる叫喚のオーム籠

預金残ゼロの大秋晴となる

年間賞・新風賞をいただく

よろこびは人には告げず夕焼けて

五輪映画待つ炎天の列に伍し

黄道下一柱埋む比翼塚

家を守りて病みゐし妻のサングラス

南瓜蒔き新山に豚放ち飼ふ

大鯰（ジャウー）釣るくろがねの糸牛の腸

さざめきて飛ぶ騎馬群を夕立追ふ

誤射死体埋めれば元の罅に

サビア鳴く空深瑠璃に回帰線

後註 1

ラジオ今出て見よとよぶ蜃気楼

連れられて盲も立てり蜃気楼

蟻地獄群れゐて語ることもなし

黍枯れゆく早嵐を遊女馬車

暗室に汗を滂沱と印度の唄

レモンもて凝らせる香り冷奴

早野に歪みて赤き月が出る

聖母祀りて島に一つの泉噴く

深井に自耀きて年めぐり来る

アラポングガ打ち出す時雨小槌かな

後註 2

竜巻を遠く秋立つ湖畔村

蘭咲いて雹に傷みし山河あり

下校児ら花野の中を日まみれに

インデアン霜どけを来て弓を売る

海の音して振れば鳴る椰子の水

野火消して咲く柑園の香に戻る

野火の遠巻く深更を荒鋤ける

野火に眼の痛みて町の灯が赤い

焚く人もなし神苑の菊枯れて

夜逃して暮春の文の行方なし

花嫁移民の消息を仄聞して

望まれて嫁し地の果に菜間引くも

珈琲樹海蕾こぞりて雨を待つ

大夏野泉より道はじまれり

鳳凰樹血を噴く翼さしちがへ

別れ棺開く黄道直下の日

日照りつむじ塵揚げて馳す棉景気

酒に魅入られて生涯棉を摘む

この地方何年かに一度雨なき夏あれば

駅に臥す東北照りの流浪群

いざり酔ひつぶらせてをり棉摘等

愛憎の彼方の月日鳳仙花

陸稻原満目枯るる軍政下

高樹より湧く嬌声や早星

雨季月夜葉木兔は音もなく飛んで

視野に穂の出揃ふや風溢るる日

宵闇に犬連れ鳴きて樹海燃ゆ

猪鬣を覗くおったまげて走る

皇太子御夫妻を迎えて移民六十年祭 六月十八日 二句

勲章を下げて泣きをり菊日和

移民祭還らじとわが征きしかど

大花野夜も匂ひて菊枕

火星夜々燃えて近づく受難の夜

祖父母へは和語で祈りて受難の夜

飲みはてて路銀をねだる棉摘か

神苑の薔薇つきて冬を咲き揃ふ

レモン酒ジョゼと呼ばれて飲まんかと

タマラナ | ロンドリーナ

一九六六年〜一九六八年

肌黒き歎きもこめつ祭笛

仕事上再び家族と離れ住む

ぬばたまの夜霧を返す相聞歌

立ち眠る放馬の浮ぶ野火襖

千仞の炎鳴り昏みへ群れつばめ

野火荒るる夜を来てむせる舞踏会

野良映画大和路に雪降りしきり

イペー明りさす拳銃を並べ売る

後註 4

犬二匹食はれ重しと豹担き来

箱庭や日月遠き橋を架け

留守番の鷺の出で咎む麦の秋

水蹴つて蹴つてコウロギわたり切る

貧しきが故に残りしトマト村

銀河なだるる師の最遠を吾がめぐる

尾に銀河巻く蠍座を頭の上に

シユラスコに樹海の燃ゆる灰が降る

後註 5

イペー咲く雨後の轡気に澄み透り

地震報ず冬月蝕の寂光野

貸し牧場冬青々と鶉鳴く

大枯野掘り望郷の屍埋む

シユラスコに酔ひし呂律の望郷歌

十字星真南を指す狩の宿

雨濡れのばったよろけて翔ちにけり

橋は沈みて水鳥の浮くばかり

山刀帯びて大枯牧場守

鄙町を越す水鳥に樹海燃ゆ

やまを見に誘はれてをり日脚伸ぶ

樹海燃え鳴く朧夜の梟二羽

花蜜柑散り込む水を提げてゆく

大渦に舞ふ禿鷹に野良屠殺

棉を摘む子もさすらひの旅につき

秋日和鳴くカナリヤを路樹に吊り

椰子割って毀誉褒貶に遠く住む

三度家族と別れ住む

時雨つゝ吾妹恋寝の北枕

なご風に菊こそ香れ花祭

稚児うたひ絵のみにおはす甘茶仏

花野ゆく日本の海の貝ボタン

冬禿鷹老いさらばへて屠所の樹に

棉腐りし町はさびれて地に沈む

長女喫まれて一晩苦しむ

毒蜘蛛の毛深き面を憎むべし

新木諸給ひて移民物語

冬蛾の灯酔ひて露人の唄に和し

ジャジネーラ着く末枯の無宿の灯

後註 6

竜巻のえぐりし疵を雷の打つ

春風や大牧中に町眠り

落し文とて万葉の遠きより

雲の峰最高といふ棉の出来

身の重み俄にプールより上る

秋風をさみしがらする港あり

香にたちて隠しバナナの失せてゐし

引越をチジューの囃す塀の上

後註 7

時計草あな蜂鳥の垂れさがる

マリランジヤ・ド・スール

一九六九年～一九七四年

山トマト触発の香の立ちこむる

ボタ（長靴）破れゐて帰省子を悲します

寒北斗早着きの獅子夜哭きして

先込の銃に撃たれて鶉墜つ

旅中朱鳥先生の訃を知らさる 三句

大花野泣けば日本が遠ざかる

餅を得て泣くわれを子が訝しむ

雪を知らぬ子が歌ふ雪の降る町を

初盆の大十字架にひざまづく

初盆や主従二世といふ言葉

雨季上る受話器火を噴く雷雨かな

連れ出して虜囚を撮るや銀河濃し

喜雨晴や生き生きと遠樹海燃え

青葉木兔吐息をもらす仮装会

選挙権乞ふ雁瘡をはびこらせ

夏並木通り悉皆鳥の名を

猿人の髪にて帰省するなかれ

雨季深き夜を点りゐる懺悔室

秋たけし大蜜源の野のにほひ

珈琲もぐ五十路の唄の汗まみれ

野の精と陽炎消ゆる稲を刈る

秋天下礎心に埋づむ連名簿

香水の移り香のある当り籤

大花野枯らさんと寄す南風千里

秋の江に釣糸垂れて保釈中

地図あけて師の句碑をとふ夜の秋

婚の宴時雨テントの溢れ落つ

ひろげゆく婚祝ぎ物へ時雨漏り

夜業憂し脛を蠍がはひ登り

シユラスコへ充たして出づる名刺入

万愚節内臓売り馬車がラツパ吹き

わが流れ寄る椰子の実を山と積む

大末黒中匂ひ過ぐ処女の群

火酒焼をして枯牧の主たり

性善は天性にして棉を摘む

毛糸編み費に足して医を志す

美談には尾鱗の生えて夜を学ぶ

穴惑胃カメラを呑みゐたりけり

とどまれば護色全きみどり蛇

手に触るるものを発止と大蜥蜴

母の訃

雨季世界哭く鳥と喪にこもりゐて

長女千鶴医大卒業

大ドームを雹どよもせり卒業歌

雨季昏し幾日濡るる放し馬

僧にまだ学徒のにほひ盆づとめ

大根を蒔けとて黒き土ありぬ

ぢいさんも親父も歩兵大根蒔く

砂蚤や熊手のごとき餓鬼の足

八方に山鳩の声棉開く

棉摘んで皆能弁の旅鳥

棉摘の餉を見し悔を晩くまで

棉摘めば夜を宝石売の来る

長男敏郎医大卒業

卒業子神に誓ひの手を胸に

プールあり雨季荒降り of 紺湛へ

検死撮影 三句

遠花火見開きしまま撃たれゐる

盲貫の頭に挿し測る穂草芯

螢火や改めらるる死者の銭

桐樹海風より淡く咲きにけり

遠電話肉を食はすなと肥馬の野を

竹箒引きずれば蝦蟇ついて来る

花向日葵泣人覆へる如く野を

油照りきらら音なく降り積り

サンジョン・ド・イヴアイ

一九七五年～一九七九年

猩々花覗きて笑ふ垣のそと

土下座せずともよきものを三十三歳

初サビア唄にはならず日暮れぬる

トツカーノ薙刀こぎに村の空

母の従弟梶川氏と奇遇

逝く春を落つる平家のごとく逢ふ

鍛冶屋鳥（アラポング）槌振りいそぐ小糠雨

山ほども芋茎を呉れぬいかにせん

花煙草日は敗戦にさかのぼり

剩り餌を捌かしに寄りぬ鮪船

サンパウロ

一九八〇年以降

二十二年ぶり日本へ 四句

桜桃忌告ぐるテレビの日本にゐ

小手毯と昔馴染の池の鯉

繁栄はわびし一人で田を植うる

地酒の香酔の香と混り村祭

年の夜を子等来て充たす乱れ籠

子へ電話九時と約して小春空

十年前山蘭採りに出たつきり

父の訃

若草を来る風にさへ涙ぐみ

贈られし苺を食べて死を知らず

日の林檎露の葡萄と熟れ揃ふ

小鳥来る口笛吹いて末娘

パイネーラ日の暮れてたつ帰り馬車

後註 9

勝鶏の片眼は涙流しづめ

戦雲とジョン デ バーロの巢の向きと

後註 10

生るる子に女を祈りマリア月

哀れ海胆割らるる棘のみな動く

潮招き波にふつ転げて怒る

恩給に女も寄り藤の昼

空を来し切手を乞へり星祭

大造湖満たされてより雨季明けず

馬迫の舌うちをせる旧漢字

白イペー雲に紛れて咲きにけり

辛じて雨ぱらつきぬ唐辛

子の恋の割勘横丁星祭

ひるサビア鳴く方へ屋根片流れ

箸運ぶ手許見らるる冷奴

手紙読み遣るしもべが一人奴隷の日

教会堂建て忘れあり燕の巢

ミナス下坂農場 二句

若き腕遅しく焼け農を説く

作四種王国に組む青嵐

ステツプの早に酔へる夕日かな

狐ジュワほんとにコンと啼きそうな

後註 1 1

狐ジュワ狼ジュワと熟れにけり

今ぞ一瀉千里と麻州野を焼ける

千鶴世界産婦人科学会の東京に向う

太平洋を子の飛びあらむ虚子祀る

虚子祀るアナス髻のまま供へ

日本松もて碑を讃へ秋の風

雹の疵詫びつつ柿を配らるる

牛馬市焦げんばかりに夕焼けて

雨待たれ初めし松葉牡丹かな

水音は彼方をゆけり溪孫咲く

次女真理医大卒業

医科卒へし娘と組める夜を“春の声”

立ち寄りて蘭をわが子と見てゆける

白兵と駆けたる日より移民の日

移民祭褪せし背広を顕彰す

蜂鳥の通ひ路にある出窓かな

ミニスカートにて木苺へ寄り難し

桜狩働き過ぎの背を曲げて

畏友井本厚急死 二句

父の死へ夏服のままパリーより

安置室蚯蚓が鳴いていまいまし

花麒麟忍び返しに塀の上に

誘はれて雨夜のプールへ泳ぎ入る

死火山を包める妻の水着かな

脂肪草雨乞の香を放ちけり

後註 1 2

葡萄甘きにつけても早歎かるる

大蜥蜴炎路をよぎるご用向き

棒切でジャララカに貌挙げさする

後註 1 3

顔出せる報恩講の鼠かな

早魃の夜を泣く小豆枕かな

鉄採って山容瘦ける秋の空

夕焼けてより山彦の返らざる

桐生農場 三句

餌に使ふ鰻を混ぜて可愛がる

枯牧は犬が懐しがるばかり

ブラジルを一手と言へり接木王

三女千夏医大卒業

医科卒ふる上雛壇に末娘

ベンチビー約束に釘さしにけり

後註 1 4

太郎冠者大シユラスコを立ち回る

雨つのりみてシユラスコをよく焼くる

ジュニナ祭当てし南瓜を担ひ来る

後註 1 5

木の実酒猿より赤く酔ひにけり

海の町先づ落花掃く人に遇ふ

金銀に木犀の苗揃へ売る

聖母像畏み畳む春日傘

草じらみいの一にゐのこづち

紙きれの地図見て来たり燕子花

海の日を潜く海豚と並び航く

紫の陽炎となる野シユラスコ

ココム違反に問われる

東芝を泣虫の木の責むること

後註 1 6

青空を来し虹鱒の初荷かな

ピラニアのミイラとなりて怒りある

後註 1 7

熱帯夜うつらうつらと明けにけり

生きること即ち遊び錦鯉

蜂鳥来三日月に眼のよく利いて

引込線奥の賑はひ牛馬市

元旦を訪ふ蜂鳥の新世界

子の額に玻璃戸のくもり小鳥来る

虚子祀る日をバウルより走り蕎麦

墓売りの来て短日をつぶされし

冬めくと野の暖かきことをいふ

ミナス山嶽へ 五句

登山靴にて地下鉄を乗り継げる

学舎見ゆ泣虫の木を過ぎゆけば

冬蒼し暫く馬車に揺らるるか

旅人の焚火銀河を焦し燃ゆ

谷川のゆゆしき濁り金を掘る

トランクを出で来し蛇の車酔ひ

歌の翼に春浅き日をピアノ鳴る

星祭る夜をうたたねの肱枕

春風やかろきを笑ふ別れの荷

指笛や夜を翔ちて舞ふ紺揚羽

シユラスコや岩塩槌をもて砕き

天皇病篤し

パウダーリヨ息濃く臭ふ春早

後註 19

花ジンジャー旧街道へ入りにけり

後註 20

毯の中小鈴が鳴れり七五三

悼む墨すりて紫陽花より淡し

竹の花藪を覆へり昭和終ふ

雨季明けのモードぢんぢん端折りかな

鬼百合と呼んで雀斑まみれなる

大枝の稲妻走りジャツカ熟る

後註 2
1

水欲りし日の夏草の匂ひかな

護送車が向ひに停る花ユツカ

遅れ来てミサより零れ桃の中

春の夜を地下に飼はれて囀れる

よく透る炎天地獄よりの声

馬鹿になるまで枝豆を食べつづけ

泳ぎ来ていつもの二三曲を弾く

泳ぎ来し妻のいどめる腕相撲

イパネマ旧跡三句

汽罐車は驢馬より小さし蜂巢くふ

蚊帳吊草覆ひて残る鉄格子

新樹下に立ちて歴史を正さるる

アマリリス岩を捉へて咲きにけり

窯出しや車前の笞の総立ちに

豊年祭大味な美女並べたり

アバカテにねんねの匙の横曲り

陽炎を鋤き込んでゆく大地かな

地カナリヤばたつく籠を提げてゆく

アラポングガ打ちて火花の匂ふほど

こぼれ木葡萄猿酒の香を漂はす

大王椰子雲にこもりて咲きにけり

紅鷺に湖白妙の渚あり

陽炎となり荒馬を騎り通す

春の滝水筒の肌濡らし汲む

海王星より便りあり桜咲く

猛毒蛇眸の笑ひゐる如くなり

昼顔は一重大西洋荒るる

蒙古斑出て長十郎熟れにけり

はらかならの碑守と仰ぐ雁の空

渡り鳥燈台無人なるはよし

空だのみなる雨乞の旅の傘

春風にゐて天道虫やはらかし

連れだちて穂わたの通る文学碑

寒木瓜と呼びごろの霜降りにけり

甘茶仏鳥居潜らせゆき給ふ

木葡萄盛り上げて青空市場かな

落鮎となりて母国を訪ねゆく

松落葉踏めば驚くけむり茸

猿酒といふとこしへの忘れ物

戻り寒手を擦って紅つつじ燃ゆ

火事跡を見立ちて巡り遇はんとは

むぐら刈られてそれつきり三十三歳

早稲は穂を止め葉に沈め雲の峰

寝業師の鼯は耳の小さけれ

火に遇ひしより口笛を戒むる

除幕碑に群れる燕となりて舞ふ

パモンニヤの帯ゆるやかに前結び

後註 2 3

カルモ公園黒白鳥

タスマニヤ夢見て流れ浮寝鳥

後註 2 4

フエジョアーダ風雨となれる窓の外

後註 2 5

本咲へつながるといふ寒ざくら

粟爆ぜて指傷めたる外科医かな

フエジョアーダ鳥食今に世に伝へ

飯店の窓際をとる星祭

野火の空オームの迷ふ十文字

長男敏郎婚約

文机に打出の小槌暖炉燃ゆ

孫といふこの無法者冬休

冴え返る日のよく見ゆる鼻柱

底冷に拇印採られし警察署

入選に故人の句見ゆ親鸞忌

六十年ぶりセントバーナード犬に会う

名犬は車で行きぬ野犬狩

べた風にまた秃鷹の降ちてきし

苗木売めしを広げし人の前

イペー咲いて不戦艦隊入港す

大御代と呼びしは昔桜散る

春愁の奥の花屋の主かな

裸一貫とは飯食つてゐるところ

蜂鳥の翼のうなり山の音

亀鳴いて季題の一つ失せにけり

風もらひ来し末っ子を剃りこかす

闇汁に大猫舌とききたまへる

初髪や忘れて遠き箱枕

ジャツカ熟る夜々瘤取りの夢を見て

海の崖車前どこまでついてくる

サビア老いてみちのくの句の帰り来し

ビタミーナ鶯色に満たしゆく

こみ合ひて鈴生りマモン中細り

後註 27

留守番にパモンニアの汗搔いてゐし

昼寢覚きのふに次女を嫁がしめ

紫陽花を挟む安全地帯かな

カピバラノラ鼻揉んで空嗅ぎにけり

後註 28

後悔のたまゆらを蚊の打たれけり

餅つき機男爵不思議がりにけり

蠍座を針とし進め夏時間

鉦振ふ市の外れのジャツカ売り

水虫やむかし陸軍二等兵

牛の垂る蒼きよだれも晩夏かな

なぐさめの言葉に語り白桔梗

追伸とある故郷の銀河かな

つつじ祭振り切つて入る時雨傘

星月夜ほのかに煙るごとくなり

脂肪草浄土の露を輝かす

バルセロナ五輪始まる

朱夏の夜を火箭翔んで点く油皿

十二年ぶりの日本 六句

旅人へ秋暑の襖取りはらひ

ななかまど紅極む美幌越

阿畔像秋風に腰捻りあひ

戦友酒卷浩兄を訪う

うな重のおもきを抱へ阿波にあり

芭蕉庵

古池は蛙棲まずと真鯉たち

山上観光リンゴ園

天狗茸コブラとなりて立上る

念腹忌に寄せて

むかごめしゑぐいと言はず召上れ

ひげ立てし左官を頼む年の暮

話し出す喜雨濡れのシャツ脱ぎながら

後藤梅園 三句

薄雲に透く白梅の枝微塵

あだ人の噂とび出す梅の中

雨遠し遠しと喘ぐ唐辛

春疾風寝言へ返事してやって

蝕甚や皆三日月に青葉影

粟拾ふ一人の山手言葉かな

アマゾンヤを回りにて 五句

昼近き盛夏のにはひ魚市場

砂の鳴る琴立てて売る祭の日

小遊船七国人の組んで乗る

アマゾンの鰯といふも鯨ぶり

減水期川陥ち込んで巨船浮く

水鳥にバスは橋より墜ちしまま

初サビア声届く限りの遠さ

イグアスー観瀑行 五句

甘庶原大地の無風帯を焼く

後註 29

大嘴鳥（トツカーノ）急用に飛ぶ瀑の空

瀑畏れ立つ人々の睦み合ふ

瀑風の奪ふ眼鏡を抑へゆく

瀑煙に天懸くる滝在るばかり

一徹者我を折りにけり更衣

手を吸ふは眠りの精よお茶の花

“夜の秋”新聞社より問ひ電話

初椎茸届く耳朶より柔らかかに

シユラスコやお腰の物に円ナイフ

後註 30

ヨーロッパを回りて

フランコの弾痕に鳩巢籠れる

バルセローナ

コロンブス立つリラ冷の港町

ピレネーの雪嶺おろしに両替る

飛行雲霞みて高しダンケルク

昨夜積みし淡雪の野をナポリへと

ヴェニス

百合鷗旅人の荷が舟で着く

スイス

アルプスの春の雪解のサラダかな

まだ厚着してアルプスの羊たち

雨雪と変るドイツへ入りにけり

大広場埋むパスコアの予約椅子

小雪舞ひ船迅く下るローレライ

ノクターン弾く春の灯に着きにけり

雨やんで雪嶺雲を脱ぎにけり

花絨毯大地は海へ沈みゆく

アムステルダム

肩すぼめ家並寄り合ふ霧の町

ウインザー城

石楼にむら雲なせり八重ざくら

大英博物館 二句

ミイラより風邪貰ひ来て落伍せる

貌の像顎欠いで夢食み難し

汗噴いて踊る肢体の光りだす

註 (数字は本文中の番号)

1 サビア ブラジルの国鳥といわれる。体長二十五センチ位、灰褐色で喉に褐色の条があり黒く大きく境は黄、鳴き声は多く人に好かれる。ツグミ科の鳴禽。人里を好む。季語は春期。

2 アラポンガ 俗称鍛冶屋鳥。森の高木に止まり金床を叩くような高音で鳴く。小刻みに打つ時と大きく打つ時がある。初代は鳴かないので籠鳥は全部二世以降のもの。

3 ジョゼと呼ばれて 「ジョゼ」はありふれた名前なので、知らない人に呼びかける時にも遣う言葉、ジョゼさんというように。

4 イペー ブラジルの春の山野を飾る花木。自イペー、紫イペー、紅イペー。黄色の黄イペーはブラジルの国花となっている。完全な落葉樹。

5 シュラスコ 大ぶりの牛肉を生木串に刺し、野外に掘られた長いかまどにかけ渡して焼くブラジルの野宴。一年中あるが季節感から俳句では冬として扱う。味付けは岩塩のみ。もとは仔牛の丸焼きであったという。

6 ジャルジネーラ ブラジルの開拓時代に重用された両側

開放、板座席の乗合バス。こうしたことから小型のお粗末なバスもこのように呼ばれるときもある。

7 チジュー 雀大の小鳥。嘲るときは必ず三十センチくらい跳び上ってチジューと 鳴くのでこの名がある。雌している感じ。春。

8 トツカーノ 南アメリカの原産の鳥で小型から大型までさまざまある。赤、黄、青、緑、白など美しい色彩のほか体長の三分の一位の巨大な嘴が特長。鳴き声は甲高い。秋。

9 パイナーラ 大木になるキワタ科の落葉喬木。淡紅色の大型花。遠景はさくらの満開に似る。秋。

10 ジョンドebarro 農家で築くパンがまに似た巣を作るブラジルの野鳥。百舌大、人里を好む。barroは泥、ジョンは人名。春。

11 狐ジュワ ジュワはブラジル全土に自生する、茄子科の多年草。狐の顔に似た実をつけた種類はこの名で呼ばれる。狐ジュワの実は黄色。秋。

12 脂肪草 アフリカよりの帰化植物。萱状で丈一メートル余。全体に線毛を有し、脂肪分に富む薄紫の牧草。同色の穂が一斉に出揃う。冬。

13 ジャララカ 小型マムシ科の毒蛇。致命的な毒を有し、人の被害の七、八十%は これによるといわれる。夏。

14 ベンテビー 小鳥の名。鳴き声そのまま呼び名となった。百舌大。人里を好む。 春。「よく見ました」の意。

15 ジュニナ祭 ジュニナは六月祭月という意味。サンアントニオ、サンジョン、サンペードロの三祭日あり、六月中を通じて「神の旗」「マストロ」等を立て 「バロン」を放ち、「花火」を打揚げ、「焚火」「踊り」などに打ち興じる。

16 泣虫の木 細くて長い葉が夙によく鳴るのでこの名がある。松の種類。冬。

17 ピラニヤ 小型は十八センチ位、大型は四十五センチもある。鋭い歯を持ち、遊 泳中の人が襲われることがある 猛魚。平アジの形。夏。

18 バウル サンパウロ州奥地の中都市、ブラジル俳句の開拓者佐藤念腹の晩年の地。

19 パウダーリョ パウは樹、アーリョはニンニク、強力なニンニクの匂いを発する 樹木。この樹の立っている原林は肥沃という。

20 花ジンジャー ショウガ科の多年生植物。芳香のある白色の花を開く。湿地を好んで自生する。秋。

21 ジャツカ 亜熱帯性常緑喬木。果実は直径三十センチ位にもなり重いものは三、四十キロになる。強い臭気があるが好む人には大いに珍重される。ドリアンとは違う。夏。

22 アバカテ アバカドー。牛酪果。秋。

23 パモンニヤ 唐もろこしのまだわかい生をすり下して牛乳、チーズ類を入れ混ぜその外皮にくるんで結び熱湯で茹でる。ブラジル風のチマキ。秋。

24 タスマニヤ 濠州の東側南方にある北海道くらいの島。黒白鳥の故郷。

25 フェジョアーダ フェジョアーダは干し牛肉、豚肉、骨付あばら肉の燻製、ソーセージ等を黒ささげでローロという香料の木の葉を入れて煮込にした代表的なブラジル料理でシユラスコと並ぶもの。奴隸の料理を元祖とするといわれる。冬。

26 ビタミーナ 「栄養素」という意味であるが、牛乳と果物、或いは野菜類などを

混ぜてミキサーにかけて夏向きの飲料。夏。

27 マモン パパイヤ。

28 カビバール 水豚。地上最大の齧歯類といわれ体長一メートル以上、体重七十キロに及ぶ。モルモット型、遊泳巧秋。

29 甘庶原 甘庶は枯葉を焼き払ってから刈られる。

30 円ナイフ 先の尖っていないまるいナイフ。

パラナ州 サンパウロの南接の州、日本の本州よりやや狭く、ロンドリーナ市は小さいロンドンという意味。北パラナの中心地で人口三十五万、パラナ第二の都市。

句集名「相聞歌」に就いて

私は今迄に三回にわたって一人暮しをしてきました。第一回がコロラード時代のロバート、第二、三回がロンドリーナ郡のタマラナであります。そのタマラナにいた頃の事になります。写場という仕事のため一日中店があけられず身辺一切の仕事は全部自分で片づけていました。そこへ時折ロンドリーナの家人から「差入」が届けられてきました。今日は二人の結婚何年目だからとか、あるいは貴男の誕生日だからと行って、知人に託すけられてくるご馳走であります。私のような迂濶な者は思いだしてもしない日付ばかりであります。当時はまだ日本産の海苔は貴重品で、街に出回っていた海苔というのは、皆ブラジル産の薄っぺらで穴だらけのひねた見るからに粗末な物でありました。家人はその海苔を破らないようにのばし、ばらつきやすいブラジル米のご飯を丁寧に展ばして巻かれたすしが夜十時頃私の許に届けられてきたものであります。私はそれを仕事をすませて夜食にたべておりました。今では自由貿易のお蔭で望みのものは何一つ手に入らないものはありませんが、昔このような生活があったことは人生にとって大変仕合せであったと思います。クマラナは標高七、八百メートルの高原になり冬季は夜になると濃い霧に包まれておりました。その中を手紙と共に託すけ物の届いたとき生れたものが標題の左の句

ぬばたまの夜霧を返す相聞歌

であります。別にいい句でも何でもありませんが苦労ばかりかけてきた家人にわずかばかり感謝の気持を込めたものにはかなりません。

上梓に先だち第一番目に挙げさせて頂きますのが私を今まで育てて頂いた、既に亡くなられて久しい野見山朱鳥先生のご鴻恩であります。次に辺境にある私を見出して頂き、日本にあられて出版その他一切の労を取って頂きました加藤耕子先生、綿密な校正をしていただいた藤島咲子氏、面倒な連絡に当って頂いた石崎緑風氏、蔭にあつて常によき助言を頂いた鶴同人の添田香積氏、影の如く私の傍にあつてすべての整理、編集、タイプ一切を取り仕切ってくれた妻の久子、俳句によき理解を示し援助を惜しむことのなかった四子、たゆまず研鑽を共にしてくれたよき仲間の皆さん諸氏に心からお礼申し上げます。

富重 かずま

あとがき

コロラード

今を遡ること三十数年前の一九五九年一月十八日、上陸港サントスからアプト式鉄道でサンパウロ高原に登ってきた私共家族四人は、サンパウロ市の街中にある煤けたルース駅でパラナ行の列車を待っていた。日本から着いたばかりの四人の家族は誰が見ても一目で新来のそれと判るいでたちであった。そこへ一人の日本人が近づいてくると、「どちらへ入られるのですか」と問いかけてきた。四十過ぎの上背のある痩せ型の精悍な感じの男性であった。「パラナのコロラードという所ですが」と答えるとこの人はかなりこの方面の事情に詳しい風で「それはいいことですね。今回の移民は殆んどがサンパウロ州の呼寄のようですが、今ではもうサンパウロ州は拓けきって日本と変わりありません。その点パラナを選ばれた貴方がたはよかったですよ。こんどいかれるコロラードというところは土質もいいし、今からというところですからね。一所懸命働かれればきつといいことがありますよ」と心から私共を励ましてくれた。五十日間親しくしてきた仲間達と離れてパラナへたった一家族だけ入っていく心細いときであっただけにこの人の言葉は掛替のない心強いものであった。

コロラードは標高四百メートル前後の準平原の上質の砂質壤土の上に生れたばかりの町であった。既にコマルカ(郡)に

指定されていたこの町は、まだ電気はおろか水道もアスファルトもないむきだしの砂地にただっ広い道が縦横に走り、ペンキで厚化粧した板屋の店が軒を連ねている丁度アメリカの西部劇にでてくるセットのような町であった。市街は中央の一部を除くと殆んど家はなく、区画整理を終えたばかりの宅地には巨大な原始林時代の切株が立ったままで、周囲には無数の焼け残り丸太が横たわっており、さながら荒海の観を呈していた。

四囲にはまだ可なりの原始林が残っており、夜高みへでると遠近に山焼きの景が望見された。私はよくもやってきたものだと思うと同時になるほどこれが新開地というものか、と合点させられた。

私共がここに移住してきたのは、この町の日本人学校の日本語教師としてであった。妻の久子がもと中学で教鞭をとっていた経験を買われてのことなのであったが、間もなく次女を妊つたため未経験の私と替らなければならなくなった。家人と入替って二年も教師をする間に持参してきた資金を悉く使い果してしまった。辞意を願いでも後任のないことを理由になかなか辞めさせてもらえずそのままずると五年余を経過してしまった。

その間妻の久子は三女を生むと小さい食堂をだしていた。これがよく流行って十分に生活を支えるところとなってくれた。私の方は半ば無理をいって学校を辞めさせてもらうと四十キロ離れた隣の小さな町へ単身赴いて写場をあげた。昔から好きであったということもあり先ず仕事を身につける

ことが主目的であった。子供達四人はどんどん成長し長女は着伯した年から首席を続け中学も最終学年に近づいていた。既に、医科を目指しはじめた長女のためにももうこの町に長居はできないというさし迫った状態に追い込まれていった。

コロラードという町は、南回帰線より六十キロばかり赤道寄りに位置しているため年の瀬が迫ると、南下してきた太陽が井戸の中へ落ち込んでいた。二十数メートルの井の底に耀々と輝く太陽はこの上もない神秘的な美しいものであったが、私には別に、また無為に過さなくてはならなかった一年が頻りに悔まれたのである。

応急措置として長女と長男をロンドリーナ市（州立総合大学の所在地）の知人に預けて転校させ、私共一家はP市管内のタマラナという同市を四十キ。離れた四百年の古い歴史をもつ小ざっはりした小邑へ移っていった。やっとコロラードを離れられる思いに私はほっと胸を撫で下ろした。

タマラナおよびロンドリーナ

コロラードが標高の低い砂質壤土の照り返しの強い土地であるならばタマラナは打って変わった涼しい高原、冷涼気候の大変住み心地のよい所であった。またここは三回に亘って私の人生の大切な避難港の役割を果してくれたところでもあった。私がこのあまり将来性のない小邑を選んで移転してきたのは、ここを一旦前進基地にして四十キロしか離れていないロ市に進出して子供達と合流を果すことが目的であった。

タマラナという町は四百年近い歴史を持つ静かなたはずまいであったが仕事の量は今一つ物足りないものがあつた。子供への仕送りと生活費に事欠くようなことはなかつたが、将来を考え、一年ほどで見切をつけて口市へ出ていった。

しかし立地に無理があつて半年も持ちこたえられずまたタマラナへ取って返した。タマラナは何故か私と同年配の戦後移民の多いところで一敗地にまみれて戻ってくる私を大喜びで迎えてくれるのも此処であつた。但し家人達は五人全部を口市に残し、またの進出の機会を伺つた。そのうち家人達から今度は大丈夫という知らせを得、下見にでかけた上で確信を抱いて引越していった。ところが不運というものは重なるもので前回より更にひどい不況にさらされることになつた。私はこの時はじめて写真の顧客というものが容易に動くものではないことを悟つた。座して食いつめる程つらいことはないが、私は少しも慌てるどころはなかつた。二年余の間に完全に写真技術を身につけてしまつていたからである。時々往年の私等の婚礼の写真を見ながら”日本ではこの位で写真屋が出来るのだから”と笑つたものである。私はいつか縦横に腕をふるつて見たいという気持ちからもうとつくに単身奥の新開地へ乗り込む腹を固めていたのである。一芸を身につけておいたのもブラジルでいざという場合に備えてのことであつた。

一刻も猶予ならぬ事態に直面してしまつた私はすぐ奥地の偵察に出かけた。

奥地に向うバスを乗替るため一旦マリランジャ・ド・スール

という町で下車した。この町には顔見知りの写真屋がいたので、二時間の待合せ時間を利用して訪ねていった。ところがいなくなっているのである。開けば二カ月程前引越していったというのである。この町が古いコマルカであることは前々から知っていたがそれ以上のことは知らなかった。私はすぐその足で市役所を訪ずれると郡の人口を尋ねた。職員に親切な人がいて、人口は六万であることを教えてくれたほかいろいろ参考になることを話してくれた後、腕の確かな写真屋がくればきつと忙しい程仕事があるだろう、ということをお願いそえた。もう奥地へ入る必要のなくなった私はすぐロ市へ取って返すと大急ぎでマリランジャ市へ引越していった。

マリランジャ・ド・スール

クマラナのほんの目の先二十キロのところにあつたこのマリランジャという町がまた一風も二風も変っていた。タマラナと同様四百年の歴史があるというものの、とてもコマルカと呼べるような所ではなかった。整然と都市計画がなされ、なだらかな斜面にきれいに石畳の敷かれた街路が碁盤の目に走り、夜は煌々と街燈が点されているのに家は殆んど建っていないのである。たまに一軒あるかと思うとすぐ二三軒空いているといった調子で、まるで墓場のような静かさ、一般商人なら目もくれないところであつた。

何故こうなつたかというところとある先代の市長が政争に敗れて、時の州知事の反感を買い、通るべき筈の国道が六キロも外れ

てしまったことに起因しているというのである。こうして世に見捨てられた廃墟のような町もさすがにコマルカだけのことはあつて学校は上は師範まであり、高みには調子外れに立派な裁判所が町を俯瞰していた。どちらを向いても五十キロ位は出ないと町らしい町はないという大時代的不便さが陰から仕事を大いに援助してくれるところとなった。

この町へ引越してきたのは年の瀬も押迫つた一九六八年十月二十日過ぎであつた。写場を整えて開業するのに二十日ばかりの日子を費し、店を開けたのは一月七日であつた。蓋を明けた仕事は思いの外好調な滑り出しであつた。撮影は月一千クロゼイロを望んでいたものが一月末二十日余の日数で早くも九五〇クロゼイロに達していた。私はやつとの思いで愁眉を開いた。この月の十八日が丁度私共の移住十周年に當つていた。親しい先輩移民の「ブラジルで生活の安定を得るにはどうしても十年かかりますよ」という言葉が思いだされた。

写場の隣の二タ扉は家人の好みで三人の伯人の娘さんを使って新鮮な感じのランショが開けられていたが、写場と相互の授け合い効果を呼んで町でただ一軒の明るい店に育つていった。

将来を考え下の二人の子も口市へだして上の子と一緒に住まわせ、車を買って与えた。私も必要上車を下した。撮影高は鰻登りに登っていった。もと一ダースずつ買っていた写真入れのカルテラは既に千枚入りの箱を写真館の名を刷り込

んで頼むようになっていた。昔を知っている材料店の主も今昔の感にたえないといった面持であった。

サンジョン・ド・イヴァイ

順調すぎる程仕事の方は実績を挙げていったのであるが、辺りの国道の地形の悪さに交通量の増大が加わって嫌な交通事故が頻発しはじめたのである。そして被災が両隣に及んでしまった。何とかしなくては、と思っっているところへよいニュースがもたらされた。マリランジャからサンジョンへ栄転していった銀行の支店長が行用で町へきたとき、家人のラシヨネットに立寄って「サンジョン市のどまん中の申し分ないいい場所を二扉貸しにだしているが権利金の高いことというのでまだ借り手のないままになっている。一度見に来たらどうか、貴女ならきつとうまくやれると思うのだが」というものであった。

マリランジャから丁度百キロ離れた町になるので日曜を利用して出掛けてみると、成程町は新開地らしい湧くような人出、貸出しの二扉は中央プラッサの真正面である。一目見るなり気に入った家人が今すぐ借りたいと言いだしたのである。私もそれとなく模索し始めていたやさきである。即座に一万の小切手を切って家主に渡しポイントを確保してマリランジャに帰った。店を処分して引越すまでに一月ほどかかったのであるが、その間サンジョンではマリランジャのジャポネースが一万の権利金を払って帰っていったという話で持ち切り

だったということであった。

引越してきても今までと違い売上を気にするような心配はさらさらなかった。家人のランシヨネツテは開店当日から大入の盛況でその景気が店を売り渡す日まで五年間続いた。私の写真の方は可なり大きな町なので既に二軒立派な写場があったが何食わぬ顔で割り込んでいった。私が写場のセナリオを組立てているところへ一人の大男がきて立った。「お前がこんどマリランジャからきた写真屋か」というのである。「そうだ」と答えると「よし、今から半年のうちにこの町から追いでしてやる」と凄んで帰っていった。私は歯牙にもかけなかった。一年もたたないうちに町の大半の撮影を奪った。他の二軒が悲鳴をあげてしまった。その頃から私は仕事の無理が応えて体調にかげりが見えはじめた。いつの間にか五十五歳という齢になっていた。どう見てもいい年である。そこで子供達の意見を容れて転業を考えることにした。

そのとき折よくホテルが売りに出されていたのを率いに、写場を整理した金を頭金にしてそれを買いとった。それから間もなく有史以来という寒さに襲われ、一望千里のコーヒー樹海が一夜にして潰滅してしまった。普通の霜害ならば根元から伐ってよみがえさせれば四年もたてば元に戻るのであるが、その時の寒害は根まで凍ったため全部抜根しなければならなかった。こうしてコーヒーの跡に棉作地帯が生れたのである。町のモビメントは、牧畜地帯、コーヒー地帯、雑作地帯という順に上っていくが棉作は雑作の中でも最も人手を要する作物である。これが景気を煽って町は人であふれ返った。

付が廻ってきたというより他に言いようがなかった。

ホテルを買うとき五十の寝台が最大半分埋まればよいという計算であったものが、連日満杯になるという予想違いが生じ、同時に買取っていたレストランテの方と並んで売上が伸びていった。

この間に長女が医科を卒業してサンパウロ総合大学の産婦人科研修医学生試験（百五十余名に二名）の難関を突破してサンパウロへ出ていった。三年後長男が医科を卒えるとブラジルから唯一人慶応医学部に招かれて東京へ旅立った。丁度還暦を迎えんとしていた私は決断を下すべきと判断し家人のランショ、私のホテルを売り払うとサンパウロを目指した。盛業中の店の処分は容易（たや）すかった。

着伯以来のパラナの二十年間は、決して日本人の好きな言葉の“成功”というようなものではなかったが、私のような我が儘者を何不自由なく振舞わさせてくれたありがたい自由の天地であった。それだけにパラナには感謝と名残に尽きないものがあった。別れを惜しんでくれる者の中に例の私に凄んだ大男の写真屋があった。「先生はサンパウロへいくのか、いいなあ」いろいろ質問に応じてやるうちに、何時の間にかこう呼ぶようになっていた彼も心から名残を惜しんでくれた。サンパウロへ越していったのは一月半ば頃であったのでパラナ生活がかつきり二十年に達していたことになる。折にふれて思い出されたのが到着時ルース駅頭に遭った先輩移民の「……パラナを選ばれてよかったですね。」という言葉であった。

サンパウロ

子供達の仕事の都合上、都心から五キロばかりのクリニカ病院（日本の東大病院に相当）に近いアパートに入居した。ここがまた大変なところであった。

夜は物音一つ聞えない田舎町と違い昼夜切れ目なしの街の轟音、煙霧に澱んだ空気、小さな窓から見える憂鬱な空、私は頻りにパラナを懐しんで子供達を困らせた。そのうち子供達の計らいで第一回の訪日を果した。その頃から私の人生の風向が少しずつ変りはじめた。日伯毎日新聞から声が掛って文章を寄稿しているうち、同紙に俳壇選者を依頼されたのがその始まりであった。三年後私はこの俳壇を踏切にして永年の念願であった主宰誌の創刊を果した。そのうちふとした切掛から俳人協会へ加入させてもらい程なく評議員に任命して頂いた。

どれもこれもみな思いがけない出来事ばかりであった。子供達に「どうです、サンパウロにできてよかったですよ」と言われてももう返す言葉がなくなってしまった。私はあと少しで七十五歳を迎えようとしている。どう見ても高年であるが幸いにしてまだ健康である。今後子供達の健康管理に従い少しでもブラジルに、俳壇に貢献していきたいと思う。

経歴

- 一九二〇年 十月二十七日、山口県玖珂郡周東町中山に出生。
本名富重計馬
- 一九三九年 三月、釜山第一公立商業学校を卒業
- 一九四〇年 十二月、現役甲種として山口歩兵第四二聯隊に入隊
- 一九四一年 四月、中支派遣二三三連隊に転属乙種幹部候補生
- 一九四六年 五月まで最前戦勤務階級曹長。五月、山口県仙崎に上陸復員 五月より四八年六月まで出生の本籍地に於て農業に従事
- 一九四八年 六月より肥料配給公団広島県安芸郡勤務・主事
- 一九五〇年 同公団解散
- 一九五一年 五月、山上久子と結婚
- 一九五八年 十二月まで食料雑貨店を経営
- 一九五九年 一月十六日ブラジルへ移住サントス上陸
- 一九六四年 五月までパラナ州コロラード市日語学校教師
六月、パラナ州ロバート市に写真館開店
- 一九六八年 パラナ州マリランジヤドスールに移転。写真館、ランシヨネツテを開店
- 一九七六年 。パラナ州サンジョソドイヴァイ市に移転。旅館、レストランテを開店
- 一九八一年 五月、店を売ってサンパウロに移転。子供達に合流
- 一九九七年 三月、第一句集「相聞歌」刊行。家族 妻、四子健在。四子全員結婚

俳歴

一九四六年 復員直後母の奨めにより句作を始め蕪村句集に感銘

一九四七年 「俳句研究」に投句

一九五一年 郷土の月刊誌「鞍掛」に拠り「菜殻火」同人吉岡鬼胡の指導を受ける

一九五三年 「菜殻火」に拠り野見山朱鳥に師事、同人。「菜殻火」在籍中に誌友賞、新風賞、年間賞、菜殻火賞を受賞

一九五九年 ブラジル移住後は「木蔭」に拠り佐藤念腹に師事

一九八三年 一月、ブラジル日系新聞、日伯毎日新聞社の依頼により同紙、新聞俳壇選を担当

一九八六年 三月、月刊俳誌「蜂鳥」を創刊。今日に至る

一九九一年 四月、「菜殻火」を辞去。五月、「耕」に入会。加藤耕子主宰に師事

一九九二年 俳人協会会員

一九九三年 俳人協会評議員

現在 サンパウロ市にあつて俳句に専念。日系コロニア文芸委員。国際俳句

交流協会終身会員。「耕」名誉同人

句集 相聞歌（そうもんか）

平成九年四月二十日 発行

著 者 富重 かずま

発行者 角 川 歴 彦

印 刷 株式会社熊谷印刷

製本所 株式会社鈴木製本所

発行所 株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二―一三―三

〒一〇二

振替 〇〇一三〇一九―一九五二〇八

電話 (〇三三) 三八一七―八五八一